

平成21年度 プロジェクト研究報告書

不登校児童生徒への援助の在り方

奈良県立教育研究所

目 次

1	はじめに	1
2	不登校児童生徒への援助の在り方について	1
	(1) 研究目的と研究方法	1
	(2) 不登校児童生徒の実態把握と課題の整理	1
	(3) 教育相談プロジェクト研究の歩みと方向性	4
	(4) 不登校児童生徒への援助の在り方	4
3	不登校児童生徒への援助の在り方についての実践的研究	6
	(1) 小学校における取組	6
	(2) 中学校における取組	15
	(3) 高等学校における取組	22
4	まとめ	32
	(1) 成果	32
	(2) 課題と今後の展望	32
	参考・引用文献	33

1 はじめに

文部科学省の調査によると、平成20年度全国で年間30日以上欠席した小中学生は、3年ぶりに減少し前年度比1.9%減の12万6805人であり、小学生は約千人減の2万2652人、中学生も約千人減の10万4153人と小中学校ともにわずかながら減少した。

しかし、本県の状況をみると小中学校の合計数では少し減少したものの、中学校は15人増の1,301人となった。この中学生の不登校の実態を出現率（千人当たりの不登校生徒数）で見ると35.6となり、過去最高の割合となっている。

不登校対策としては、スクールカウンセラーの配置や適応指導教室の整備、問題を抱える子ども等の自立支援など、様々な事業が行われてきたが、不登校児童生徒数及びその出現率とも、ここ数年大きく変化してこなかった。

このように不登校の問題は、本県にとって依然として極めて大きな課題である。

教育相談プロジェクトチームは、不登校の問題に焦点をあて長年にわたり取り組んできた。これまでの研究では、不登校に対応するには児童生徒一人一人の心に寄り添いながら、さらにグループや学級集団を育てることが重要であることから、学校カウンセリングの充実に努めてきた。本研究では、過去7年間の取組を踏まえ、不登校児童生徒への援助の在り方をテーマとして、小・中・高等学校の指定研究員の協力を得ながら、プロジェクト研究を進めることとした。

2 不登校児童生徒への援助の在り方について

(1) 研究目的と研究方法

ア 研究目的

校内での教育相談の在り方、教育相談組織の効果的な運用や、外部専門機関等との適切な連携を基盤とした不登校児童生徒への援助の在り方について、事例を通して研究する。

イ 研究方法

- ・ 奈良県の不登校児童生徒の実態把握と課題の整理
- ・ 小学校における不登校児童への援助の在り方についての実践的研究
- ・ 中学校における不登校生徒への援助の在り方についての実践的研究
- ・ 定時制高等学校における不登校生徒への援助の在り方についての実践的研究
- ・ 実践研究を基にした成果と課題の検討

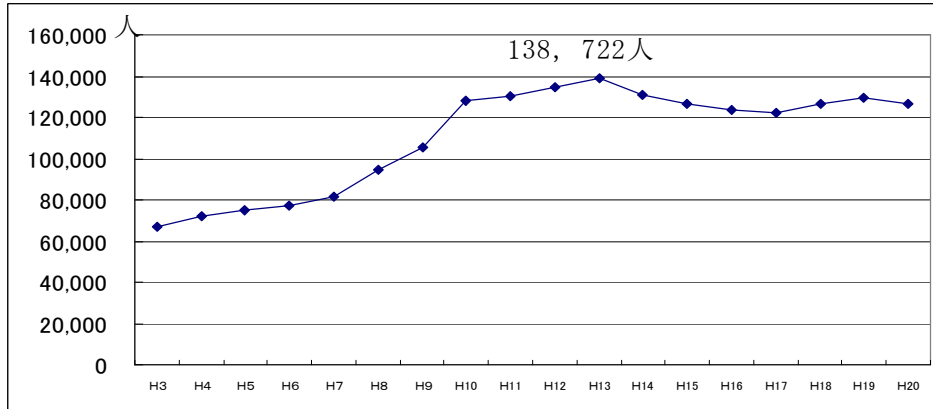
(2) 不登校児童生徒の実態把握と課題の整理

ア 不登校児童生徒の実態把握

まず、文部科学省の平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」から、不登校児童生徒の全体的傾向をつかむこととした。

(7) 全国の状況

グラフ1は、平成3年度から平成20年度までの全国の不登校児童生徒数の推移を表している。平成7年度までは、緩やかな増加であったが、平成10年度には大幅な増加がみられ、平成13年度がピークとなる。その後、年々減少傾向にあったが、平成18年度には、再び微増に転じた。とりわけ平成18年度以降の3年間は、中学校では約35人に1人の割合となっており、中学校の不登校出現率は、ここ数年高い割合のままである。

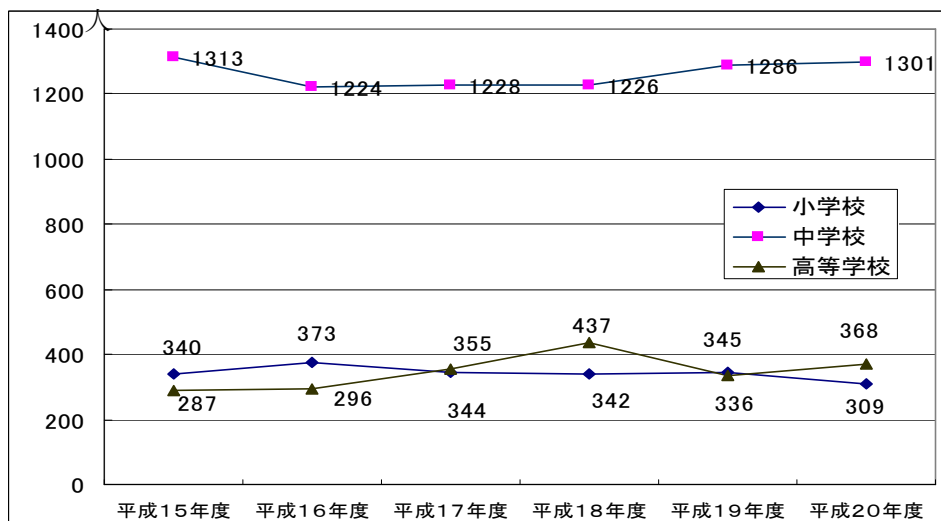


グラフ1 全国の不登校児童生徒数の推移

(イ) 奈良県の状況

グラフ2は、平成15年度から平成20年度までの奈良県の「児童生徒の生徒指導上の諸問題に関する調査の状況」調査（公立のみ）による、不登校児童生徒の状況である。奈良県の不登校児童生徒の状況は、全国の結果と同様に平成13年度をピークに減少傾向にあったが、校種別では、小学校はほぼ横ばい状態で推移し平成20年度は309人で平成19年度より36人減となった。中学校では再び平成19年度から増加傾向となり、平成20年度は1,301人で平成19年度より15人増加している。

また、高等学校では約1%前後の出現率で推移していたものが、平成17年度に増加に転じ平成19年度には一旦減少したものの、平成20年度には32人増加している。



グラフ2 奈良県の不登校児童生徒の状況

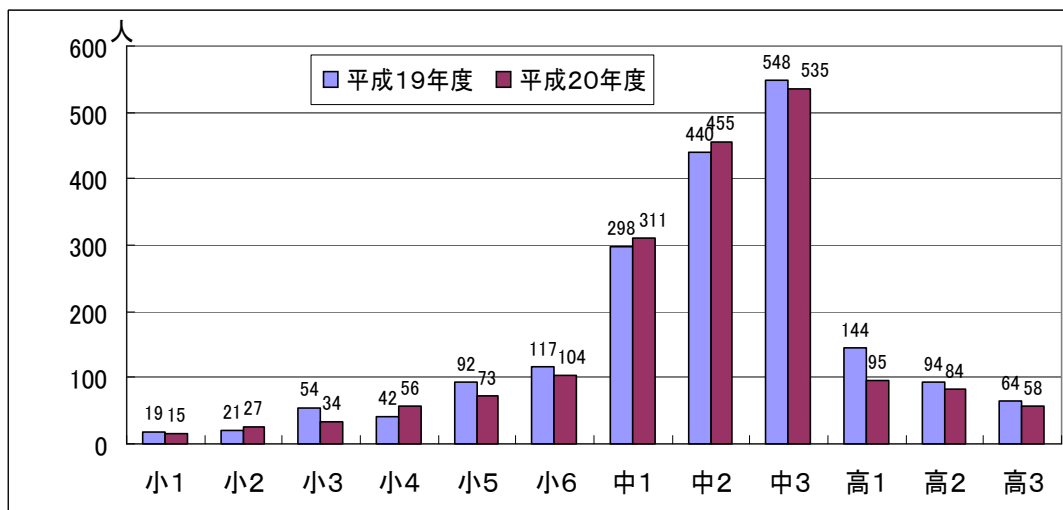
グラフ3は、平成19年度・平成20年度の奈良県の学年別不登校児童生徒の状況を表したものである。

学年が上がるにつれて不登校児童生徒数が増加していくのが顕著である。特に中学校入学後にその数が急増しており、環境の変化や新しい友人関係など様々な要因が引き金となり、不適応状態に陥りやすいと考えられる。

高等学校では、1年生が最も数値が高い。高等学校の不登校生徒数は、中学校に比べると

少ないが、1年生で不登校であった生徒の約36%に当たる133人（平成19年度は119人）が中途退学をしたことも分かっている。

また、不登校のきっかけと考えられる状況は、どの校種とも本人にかかわる問題が一番多く、社会性の未熟さや対人関係に悩む生徒の姿が見えてくる。



グラフ3 奈良県の学年別不登校児童生徒の状況

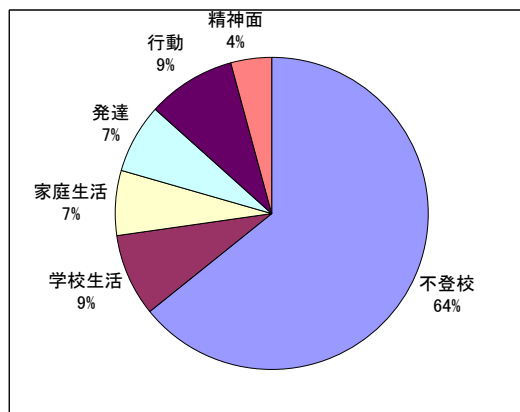
イ 来所教育相談の状況

次に、当研究所の来所教育相談から見えてくる実態を明らかにしたい。

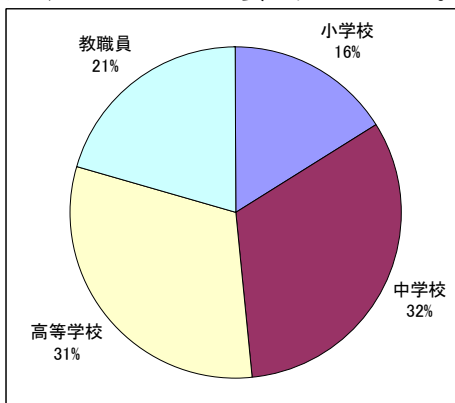
当研究所の教育相談部では、学校や家庭における幼児児童生徒の発達及び教育に関する諸問題について、来所教育相談を実施している。

グラフ4で示しているように、内容別では不登校が64%と全体の約3分の2を占めており、不登校が深刻な課題であることがはっきり分かる。（平成21年度受付）

また、その他の傾向を見ても、子どもへの接し方に戸惑う保護者の姿や、家庭や学校での生活に苦しむ子どもの姿が見えてくる。



グラフ4 内容別来所教育相談の状況



グラフ5 不登校の校種別内訳

グラフ5は、グラフ4で示した不登校の相談件数の校種別内容である。一番多いのは32%の中学校であるが、高等学校は31%でほぼ同数となっている。

「児童生徒の生徒指導上の諸問題に関する調査の状況」調査で報告される高等学校の不登校生徒数は、多くはないものの、先に述べたように進路変更という大きな課題と向き合う必要があるため、相談件数が増えていると考えられる。

(3) 教育相談プロジェクト研究の歩みと方向性

学校現場においては、様々な課題を抱える児童生徒の現状に適切に対応するため、生徒指導と教育相談体制の充実が求められている。

当研究所では、不登校問題の改善や解決を目指して、教育相談体制の充実に向けたプロジェクト研究を実践的研究として進めてきた。平成14年度から平成16年度においては、「子どもの心をつかむ教育相談の在り方ー組織的な支援体制の構築に向けてー」をテーマに研究を進め、組織的な支援体制作りを目指した。その中で組織的な体制作りを進める上で、チーム支援による援助システムとしての、コラボレーション（協働）、コーディネーション（連絡調整）、コンサルテーション（援助介入）といった機能の必要性について報告してきた。

また、平成17・18年度においては、「開発的な教育相談の在り方ー児童生徒の発達段階に応じた効果的な指導法の研究」をテーマに児童生徒の問題行動に対して、事後対応だけに終わらず、問題行動を未然に防ぐ効果的な指導法として、子どもの実態に即した心理教育的援助の在り方について研究した。人間関係づくりを進める構成的グループエンカウンターやアサーショントレーニングを学習活動に組み込むなど、開発的な教育相談による実践的研究を進めてきた。

さらに、平成19・20年度においては、「学校カウンセリングの進め方ー児童生徒の発達段階に応じた効果的なカウンセリングの実践的研究ー」をテーマに児童生徒の人格形成や様々な問題解決に向けて、具体的かつ効果的な学校カウンセリングの研究を進めた。

学校現場における児童生徒の実態を的確に把握し、豊かな人間関係を構築できるように心理教育的援助を行い、個と集団の相互の成長発達を意図した学校カウンセリングについての実践的研究を進めてきたのである。

本年度は、これまでの研究成果を踏まえた上で基本に戻るという意味も含め、個を援助するという視点を大切に「不登校児童生徒への援助の在り方」をテーマに、事例を通して実践的研究を進めることとした。

(4) 不登校児童生徒への援助の在り方

不登校児童生徒を効果的に支援するには、校内の教育相談体制作りや、発達段階ごとの個に応じた取組と集団を高める取組の双方を融合しながら進めていくことが重要である。

しかしながら、小・中・高等学校とそれぞれの校種ごとに組織体制や、子どもの発達段階における課題には違いがある。児童への学級担任のかかわりが主となる小学校においては、教師が一人で抱え込むことのないような支援の体制作りが必要である。また、思春期の大きな心の揺れや環境の変化により様々な不適応が顕在化してくる中学校においては、学級担任を中心とした多くの教師がいろいろな立場から支援する体制が有効である。そして、義務教育を修了し、自己実現を目指して社会への一歩を踏み出すウオーミングアップとなる高等学校においては、生徒自らの目標設定や社会的自立を支援する体制が必要である。

以上のことを踏まえて、平成21年度は、小学校・中学校・定時制高等学校において、各校種の特性を生かしつつ、児童生徒の発達段階に即した取組を行った。以下に報告する。

3 不登校児童生徒への援助の在り方についての実践的研究

(1) 小学校における取組

「不登校児童生徒への援助の在り方」

奈良市立伏見小学校 養護教諭 安井美穂

Yasui Miho

ア はじめに

本校の校区は、大茶盛で有名な西大寺や行基の寺として知られる喜光寺の周辺など、古い歴史ある地域と新しく開発された住宅地が混在している。

児童は、明るく元気な児童が多く、放課後や休日には学習塾やスポーツクラブ等に通う児童も少なくない。不登校児童数は多くないが、低学年時の登校渋りや母子登校・周期的に週に2・3日欠席する児童、休み時間を特別支援学級教室や保健室で過ごす児童、一人で廊下を歩きまわる児童等があり、学校生活に不安定さを抱える不登校予備群が潜在している状況がある。

教育相談部は、5年前に校務分掌に位置付けられ、特別支援コーディネーター・生徒指導主任・養護教諭の3名で構成されている。要配慮児童の情報交換・必要に応じた対応の検討や職員への提案・スクールカウンセラー（以下SC）の相談予約の調整及び保護者への啓発講演会の開催等を行っている。しかし、不登校児童の援助については、担当者がそれぞれの立場で相談を受けて対応をすることが多いため、相談部として組織的な不登校対策が行われているとはいえない状況がある。このプロジェクト研究で、組織的・効果的な不登校児童への援助及び予防の在り方について探りたい。

イ 本校の課題

表1に示すように、昨年度の学校評価からは、学校生活についておおむね良好な回答をしている児童が多かった。しかし一部には、登校してから教室に入るまでに時間のかかる児童やささいなトラブルでパニック状態に陥る児童がいる。このような高いストレスを抱えている児童がいるため、児童のストレス軽減を図る必要がある。

また、困ったときや悩んだときに、気軽に相談できる教師がいないと考えている児童が約8人に1人いることも分かり、気軽に相談できる相談体制を整備する必要がある。

これまで、不登校児童への援助は、管理職や学年・生徒指導部・特別支援・養護教諭等がその時々で連携しながら対応してきた。より適切な対応をするためには、校内体制としての不登校児童への援助及び校内外での支援・連携ができるよう、教育相談部の組織的な運用を考えていく必要がある。

表1 昨年度の学校評価（児童） (一部抜粋)

学校は、楽しく遊んだり勉強したりできますか。	はい・だいたい … 94%
学校の中で仲の良い友達はいますか。	はい・だいたい … 98%
先生に話したり相談することができますか。	できない … 12%

ウ 課題解決に向けた取組

(7) ストレスマネジメント教育の実施

静かな場所で、リラクゼーションの方法を知らせ体験する時間「フォアフォアタイム」を試行し、児童の感覚の変化やアンケート調査からストレス軽減についての効果を調べる。

また、5年生の保健「心の健康」の学習に関連させて、ストレス反応チェック・ストレスマネジメント教育を実施し、児童のストレス状態及び授業の効果を調べる。

(イ) 個別相談時間の設定

保健室の個別相談「お話しさぎ」を設け、希望する児童が個別相談できる体制を作る。

(ウ) 効果的な組織運営についての検討

職員対象の教育相談についてのアンケートを実施し、その結果から、効果的な教育相談組織の運用について考える。

また、過去の不登校（及び不登校傾向）克服事例から、校内の支援体制について見直す。

エ 取組の実際

(7) ストレスマネジメント教育の実施

a 「フォアフォアタイム」の試行

集団への適応に課題をもつ児童に、静かに自己をコントロールできる場所と時間を保障し、リラックスできる方法を体得させることと、児童が不適応状態に陥る前に予防的なかかわりがもてるようにすることを目的に実施した。



写真1 フォアフォアタイム

○実施について

時間：月に1回（月曜日）昼休み休憩時間（13時35分～55分）

対象：全校児童 第1週は低学年・第3週は高学年

場所：視聴覚室

○実施の流れ

- ・児童は、入室時に「現在の心の状態」を確認し、レベルポストにピンクのカードに名前を書いて入れる。
- ・養護教諭の指導で、呼吸法を練習した後にリラクゼーション音楽をかけながら漸進性弛緩法を行う。
- ・児童がリラックスできた状態で眼を閉じ、静かにゆっくり時間を過ごす。



写真2 心のレベルポスト

- ・終了時には、覚醒動作を行い、「実施後の状態」を確認し自分のレベルポストにグリーンカードに名前を書いて入れる。

○実施上の注意等

- ・一人一人がリラックスして過ごせるよう「フォアフォアルール」を設定する。「あばれない」「しゃべらない」「一人で行う」を守らせ、遊び場にならないように注意する。
- ・実施中は、必ず教育相談部職員が1名以上在室し児童だけで教室を使用させないこととし、職員は自由に参加し体験及び児童観察を行うことができる体制をとることとする。

- ・実施前後に行う児童の自己申告による状態レベルから、必要に応じ学級担任と連絡を取り合い児童理解を深め、不適応状態に陥る前に予防的対策を講じるようにする。

○実施状況（H21.9月～12月）

実施を予定した2学期に感染症が流行したため、低学年4回と高学年2回の合計6回の実施となった。のべ85名の参加があり、1回以上参加した児童は65名で全校児童の約9%であった。参加児童の学年別割合は、低学年が8割以上であった。（表2・グラフ1）

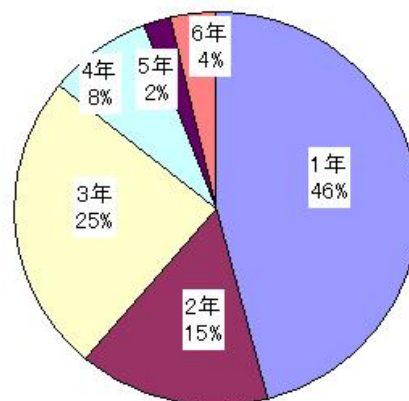
児童が自己申告した心の状態は、多くの児童が実施前に比べて1または2段階気分が良い状態に移行し、マイナス方向に移行している者はほとんど見られなかった。（グラフ2）

2学期終了時でのアンケート結果からは、参加してスッキリした、ゆっくりしたと感じたものが多くあり、おおむねリラックス効果が得られていると考えられる。（グラフ3）

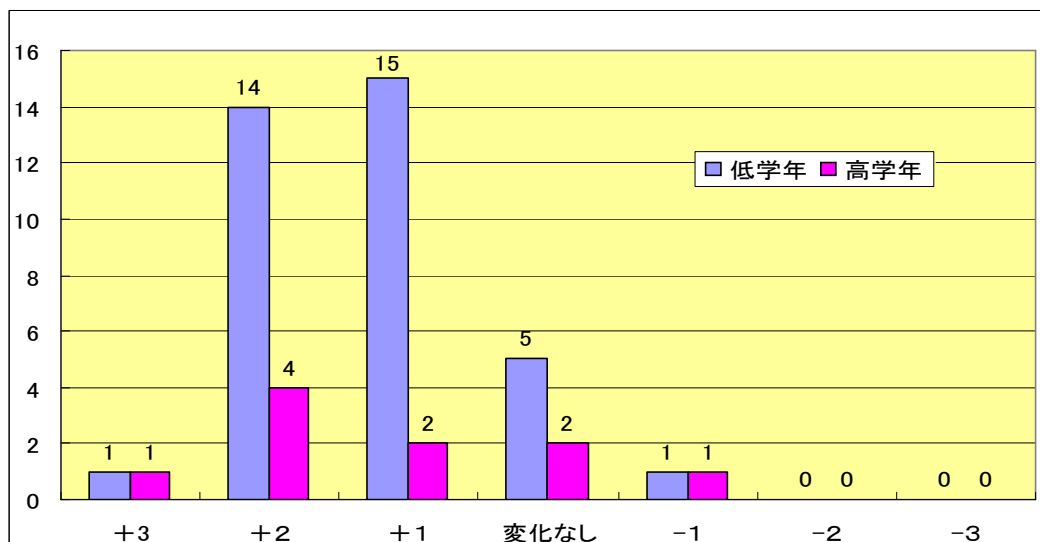
また、参加者が少なかった高学年児童に要望を聞いたところ、実施時間を長くして欲しいと答えた児童がいた。今後の参加希望については、「また行きたい」74.5%「わからない」25.5%「行きたくない」0%という結果であり、実施継続の希望が見られた。

表2 1回以上の参加児童数と割合

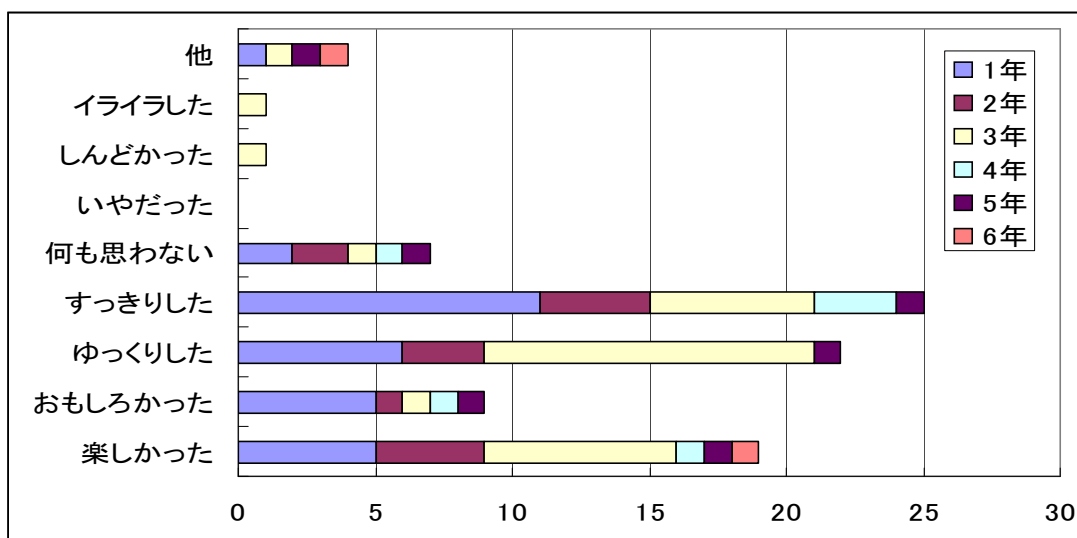
学年	参加	参加率	実施数
1年	25人	21.6%	4回
2年	10人	8.4%	
3年	17人	16.3%	
4年	6人	4.9%	2回
5年	2人	1.9%	
6年	2人	1.6%	
全校	62人	9.0%	6回



グラフ1 参加者学年別割合



グラフ2 実施前後の変化（前後両方提出した記録のみ 低学年36人 高学年10人）



グラフ3 参加して感じたこと

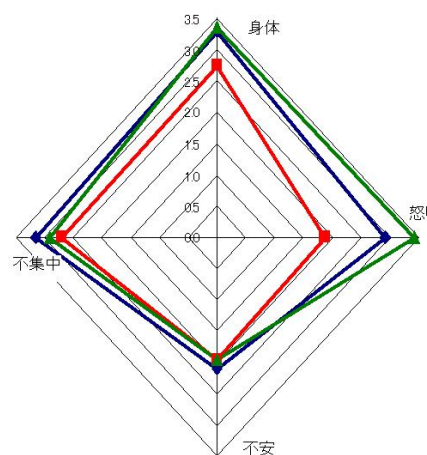
b 5年生での授業実施

5年生保健体育「心の健康」の学習と関連させて、ストレス反応とその対処について理解する授業を実施した。

題材：「ストレス反応を理解し、小さくする考え方・対処の方法を知ろう」（2時間・90分）
 ねらい：
 ・ストレスの原因（ストレッサー）と結果（ストレス反応）について理解する。
 ・ストレス反応を低くする考え方（コーピング）を知り、対処できる力を付ける。
 ・腹式呼吸・リラクゼーション方法を体験し、使えるようになる。

表3 ストレス反応チェック結果1（事前調査）

	高ストレス	中ストレス	普通	低ストレス
1組	8.8%	8.8%	52.9%	29.4%
2組	5.7%	8.6%	57.1%	28.6%
3組	8.8%	17.6%	55.9%	17.6%
学年	7.8%	11.7%	55.3%	25.2%



グラフ4 各組のストレス反応

事前に行ったストレス反応チェックの結果、要配慮や問題行動のみられる児童だけでなく、普通に過ごしている児童に高いストレスの場合があることが分かるなど、結果を数値として客観的に見る事ができた。また、学年全体では低ストレスの児童が多いことに気付いた。（表3）全体的に不安傾向は低いものの、身体や不集中・怒りの数値が高い児童がいた。（グラフ4）

怒りの反応が高い学級にストレス対処チェックを実施した結果、相談による対処の点数が最も高く、リラックスによる対処は低い状態であったため、リラクゼーションを体験しストレス対処法として使えるようになることが有効であるとわかった。

また、児童のストレス反応と対処方法を数値から知ることで個別指導に有効な情報を得ることができた。高ストレスで「気持ち押し込め」の高い児童や普通・低ストレスで「傷つけ発散」の高い児童があり、丁寧な対応が必要な児童が見えてきた。(表4)

表4 個別対応が必要な児童の結果

	身体	怒り	不安	不集中	得点合計	相談	問題対処	リラックス	押し込め	傷つけ
児童1	10	15	15	12	52	4	19	0	20	15
児童2	10	14	9	6	39	10	14	13	14	0
児童3	5	0	0	2	7	0	2	3	8	14
児童4	1	0	0	0	1	7	8	8	9	1

《ストレス反応》

《ストレス対処》

○授業後の児童の感想

- ・深呼吸すると気持ちいい。
- ・寝転んだとき気持ちよかった。
- ・力が抜けてきもちいいな…。
- ・ストレスがたまったら、人に八つ当たりじゃなく、落ち着いて深呼吸するといいいね。イライラするときでもいいかも。
- ・少し、イライラがなくなった感じ。
- ・雲の上にいる気分で、すべてを忘れてしまいました。
- ・人には、いろいろな「ストレス」「ストレスター」があり、よく分かりました。ねころんで、息を吸ったり吐いたりしたとき、とっても気持ちよくなって気持ちが少し楽になりました。これからも、ストレスがあったらやります。
- ・今日の授業をして「ストレス」を解消する方法など、いろいろなことをみんなで考えてよかった。これから「イライラ」したときは、深呼吸しようと思いました。

c 個別相談時間の設定

教室では相談できないと感じている児童に、気軽に相談できる場を作ることを目的として、保健室での個別相談「お話しうさぎ」の時間を設定した。児童の話をじっくり聴くことでストレスの軽減を図り、学級担任と養護教諭が情報交換しながら児童の不安解消・精神安定を図ることができればと考えた。

相談方法：掲示板の予約カードに学年・組・名前を書き養護教諭に渡し、相談日を予約する。

相談時間：午前8時～8時25分 相談場所：保健室か相談室



写真3 案内の掲示

9月から保健室前掲示板に「お話しうさぎ」の案内掲示を行ったが、2学期の利用者は0名であった。

保健室には怪我や病気の来室以外に、不登校の傾向があり登校時には必ず顔を出す児童

や、トラブルがあると頭痛を訴える児童・休み時間になると一人で本を読みに来る児童・他の来室者がいないと隣のソファに座わり「あのな…」と家庭状況を話し始める児童等、心の不安定さや友達関係や家庭でのストレスを抱えながら来室する児童がある。このような状況から、児童の相談場所として保健室が有効であろうと考え時間を設定したが、児童が求める体制ではなかったと分かった。

(イ) 効果的な組織運営についての検討

a 職員へのアンケート調査から

不登校児童を担任した経験のある教員に対し、校内支援体制・外部機関との連携・教育相談部への要望等についてのアンケートを実施した。

アンケート調査の結果から、校内支援では、学級担任から期待されている援助内容があり、精神的負担の軽減が期待できることがわかった。(表5. 6. 7) 外部連携においては、仕事時間・仕事量は増えることもあるが、精神的負担や保護者対応については軽減が期待できる。また、児童・保護者にかかわり情報をたくさんもっている専門家と連携できることで、学級担任や保護者が安定し、援助の方針や不登校についての理解が深まり良い方向に向かうことが期待できる。(表8. 9. 10) 今後に向けての意見の中には、「会議を開いてみんなに協力してもらうことがすごく大事なことであり軽減になるが、回数が多すぎると本人が他の仕事もしつつ、それにかかわる時間が多くなり疲れが倍増していく。」との回答があり、忙しい時期の時間的負担を軽減する方法やケース会議・外部連携のもち方を教育相談部が事例ごとに考え調整していく必要があることが分かった。

表5 経験した援助内容と支援者(回答者: 14人)

家庭訪問	保護者面接	児童支援	ケース会議	事例検討	相談相手	専門機関紹介
校長・教頭	校長・教頭	校長・教頭	校長・教頭	学年主任	学年主任	教頭
学年主任	学年主任	全 員	同学年教員	同学年教員	同学年教員	
同学年教員	同学年教員	同学年教員	同和推進		前学級担任	
生徒指導		養護教諭			養護教諭	
専科教員						

表6 他職員がかかわることによる学級担任の負担の状態(回答者: 11人)

	軽くなった	変わらない	重くなった	どちらとも
1: 仕事量	1人 (9.1%)	6人 (54.5%)	2人 (18.2%)	2人 (18.2%)
2: 時間的	1人 (9.1%)	6人 (54.5%)	2人 (18.2%)	2人 (18.2%)
3: 精神的	9人 (81.8%)	0人 (0%)	2人 (18.2%)	0人 (0%)

表7 学級担任の負担軽減が考えられる援助内容(回答者: 17人)

家庭訪問	保護者面接	児童支援	ケース会議	事例検討	相談相手	専門機関紹介
6人	8人	12人	8人	2人	14人	10人

表8 かかわった外部専門機関（回答者：8人）

教育研究所	児童相談所	適応指導教室	民間 カウンセリング	民間 フリースクール	教育委員会
3人	2人	2人	1人	2人	1人

表9 外部専門機関との連携による学級担任の負担の状態（回答者：8人）

	軽くなった	変わらない	重くなった	どちらとも
1：仕事量	1人（12.5%）	3人（37.5%）	3人（37.5%）	1人（12.5%）
2：時間的	0人（0.0%）	4人（50.0%）	3人（37.5%）	1人（12.5%）
3：精神的	4人（50.0%）	1人（12.5%）	2人（25.0%）	1人（12.5%）
4：保護者	3人（37.5%）	3人（37.5%）	1人（12.5%）	1人（12.5%）

表10 連携での効果（良かったこと・課題となったこと）（回答者：6人）

《良かったこと》
・学校での様子とは違った面を知ることができたこと
・情報交換ができ、同じ方針の下で児童・保護者と関わること
・指導方針に別の視点が入ったこと
・学級担任に対しての助言で不安が薄らいだこと
・保護者の心の支えになっていたこと
・保護者への対応を分担できたこと
《課題となったこと》
・時間がとられる
・連絡の取り方（どこまで密にとるのか、以前の経過が複雑で伝えきれなかった）

b 過去の不登校克服（改善）事例から

事例1：不登校傾向→全欠→再登校

2年生後半より体調不良による欠席が増加し始め、教育研究所で母子並行面接を月2回受けるようになった。3年生から全欠状態となり、学級担任は、教育研究所とも連携しながら、家庭訪問を行い、児童及び家庭の状況を見守る対応を続けた。

4年生で生徒指導部の家庭訪問により再登校が始まったが、母親の希望もあり卒業まで研究所での相談を継続し状況を見守る対応を行った事例である。

週1回の家庭訪問では、状況に目に見える変化がない中で、学級担任は研究所の先生と相談することで不登校の意味を理解し、対応についての不安に陥ることなく児童・母親にかかわることができた。研究所からの情報は、面接をもつことで母親が安定している状況や児童が家庭で不安のためにとる行動等、

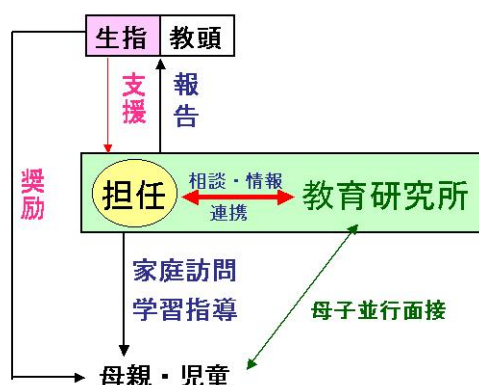


図1 事例1の連携

学級担任の知らない母子の姿を知ることができ、家庭状況を理解する上で大変役立った。また、良いタイミングで生徒指導部が登校の奨励を行ったことで再登校することができた。

事例2：登校渋り→別室登校→全欠→フリースクール（FS）通級

1年生時より母子登校状態になり、徐々に教室から離れ、かかわる人から逃げる状態になった。その後、他の児童がいない時間帯に母子登校し教室で過ごした。

保護者が、SCと相談し市の適応指導教室への通級を試みるが、初回の通級でパニック状態となり、数回で終了した。保護者とSCの相談もその後中断した。2年生は、母子で別室登校し、自習したり、学級の様子を遠くから眺めたりして過ごした。

その後全欠となったが、民間FSへの通級を始め、徐々に人とのかかわりができるようになった事例である。

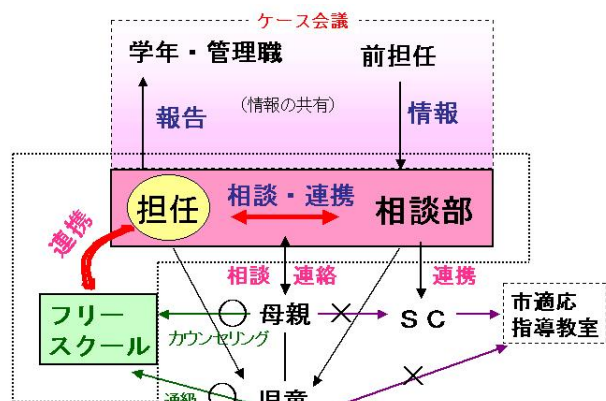


図2 事例2の連携

校内ケース会議で報告し、対応を検討。学級担任と相談部で両親の面談を実施、母親との連絡ノートやFSカウンセラーとの情報交換等を行い本人の状態を確認しながら、保護者に寄り添う対応を行った。相談部と一緒に考えながら、保護者とのかかわりやFSとの連携を複数で進めてきたことで、本人・保護者・FSスタッフとの信頼関係が深まった。連携を継続できたことで、FS内の活動観察や本人と面接できる状態まで関係性が進み良好な状態になった。

事例3：突然の不登校→保健室登校→登校するが不適応あり→対人関係回復へ

4年生で、教室でのトラブルから友人関係が不安定な状態になり、泣きながらパニックを起こす状態が見られるようになった。朝、突然「学校へ行かない。」と泣き、母から電話連絡が入った。ケース会議で、状況報告をし検討を行った。児童や保護者への対応について、役割を分担し、養護教諭は児童の気持ちを聴く家庭訪問を行い、SCのカウンセリングにより保護者の心の安定を図り、生徒指導部はトラブルの対応・予防のため指導を行うこととなった。

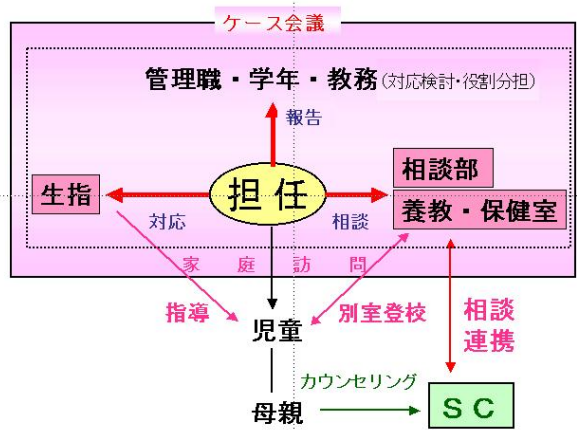


図3 事例3の連携

SCと連携しながら児童・保護者に保健室までの登校を促し、保健室では児童の不安解消・精神安定を図るように対応した。徐々に教室での授業に入れるように、学級担任が教室内の環境調整を進めた。

教務主任を中心としたケース会議で意見交換し対応を考え、かかわりの内容を各担当者に割り振り組織的に動いたことで保健室登校ができるようになった。保健室は、再登校のステップ及び本人のクールダウンの場所となり有効であった。しかし、再登校後の日々起

こる問題についての情報をケース会議で共有することは、時間的に困難な状態であった。対応する人が多くなるほど、学級担任が問題に対応しながら誰にどこまで報告するのが課題となった。

事例4：登校渋り→母子登校

1年生時より、泣いて教室に入れない登校渋りの状態から母子登校となった。教室で母親が幼児連れ、隣の席に座って過ごすとし、学習を進められるようになったが母親から離れられない状態が続いた。

学級担任と養護教諭で児童の状態を見ながらその時々に対応を検討し、保健室を活用しながら支援を進めた。

保健室を、教室での学習が進まない状態のときには母と学習や休養をする場所、教室で頑張った後には母子で給食を食べる場所、一人で教室に入れるときは母親待機場所等とすることで、本人が安心して学校に居られることを助ける役割を果たした。

また、学級担任・養護教諭以外に管理職・特別支援教員・生徒指導部・学年教員・その他職員がそれぞれ本人や母親・幼児に声かけを行い、かかわりをもつようにしながら学校生活や人に慣れて学校に居やすい環境づくりを行った。

管理職から他学年教員まで多くの方が本人や母親や幼児にかかわることで、本人だけでなく母親もたくさんの人に見守られていることを実感し安心感をもつようになり、安定した。

本人は、徐々に学校に慣れ母親と離れて過ごせる状態から、登下校のみの母子登校となり友達と登校する状態へと回復した。事例の対応状態をオープンにすることで、校内の職員がそれぞれ直接的なかかわりを持ち、学級担任が毎日母子と対応する負担も軽減された。また、保健室は児童と母の安定の場所としても有効であった。

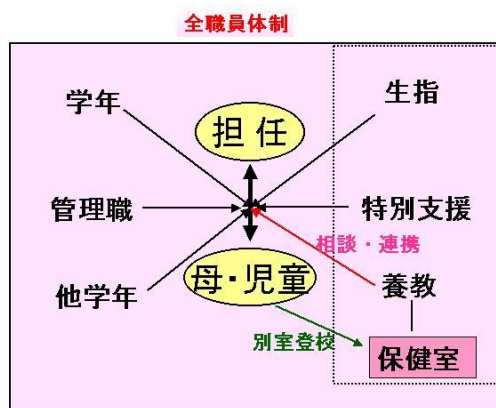


図4 事例4の連携

エ 成果と課題

(7) ストレスマネジメント教育の実施

児童の変化やアンケート結果から、「フォアフォアタイム」でのリラックス効果を実感していることや継続実施を望んでいることが分かり、一定の効果があつたと考えられる。低学年児童では、リラクゼーションの体験だけでなく導入時アイスブレイキングを取り入れたことで安心して参加できたように思われる。また、5年生で「心の健康」の学習延長上にストレスマネジメントの授業ができたことはタイムリーであった。リラックス効果を実感し「フォアフォアタイム」に行ってみようと思った児童もあつた。ストレス反応・対処チェックでは、児童だけでなく学級担任が児童を理解する上でも参考になった。

今年度の取組の成果を確認し、今後どのように続けていくかを検討するとともに、効果や成果を見える形にし、児童の変容を調べていくことが課題となる。

(4) 個別相談時間の設定

相談が必要であろうと思われる児童はいるが、時間を設定しても積極的な相談が行われるわけではないことが確認できた。また、しんどさを抱える児童が早朝から相談に来るとい

時間設定に無理があったと思われる。

保健室内で話をする児童の状況から、話しやすい場所ややわらかく開かれた雰囲気は児童に安心感を与えられるので、今後は特別に時間を設けるのではなく『いつでも来てね、なんでも話してね』のメッセージを児童に届けるように考えたい。

(ウ) 効果的な組織運営についての検討

職員のアンケート結果から、校内支援は学級担任の精神的支えになり、また外部連携では負担になることもあるが、登校できていない児童やその保護者の一番近くで対応する専門家と相談・情報交換することで協力して援助方法を考えることができ、対応の幅が広がり結果的に児童にとって良い援助ができることが分かった。また、不登校克服（改善）事例を見直すことにより、校内には不登校児童や学級担任に対して援助できる人材資源があり、これまでもそれぞれその立場でできる援助を行ってきたことが確認できた。

今後は、相談部が対応のコーディネーター的役割をもちながら共に事例に関わる人を広げ、会議や連携の在り方・時間設定を考えながら校内組織の運用を進めていくことが課題である。

オ おわりに

校内には、不登校児童だけでなく不適応状態やストレスを抱えた児童があり、児童への支援が必要と考えていたが一步を踏み出せない状態であった。今回の指定研究を受けたことで、教育相談部に働きかけ、職員全体に不登校や児童のストレス状況の対応について提案を行い、取組を実施できたことは大きな成果であった。今年が取組だけで、児童の変容を語るができないが、反省を踏まえ今後も取り組んでいきたい。

(2) 中学校における取組

「不登校児童生徒への援助の在り方」

奈良市立都南中学校 教諭 上木戸 政子

Uekido Masako

ア はじめに

本校は、奈良市の南部に位置し、校区のおおよその広さは東西、南北それぞれ9 km近くにわたる。全校生徒は603名である。校区には5つの小学校があり、規模や環境は様々である。そのためか、1年生の1学期は生徒間のトラブルが起こりやすい。そのことを引きずって不適応が続くケースも見られる。入学後いわゆる「中1ギャップ」にぶつかる生徒も少なくない。また、小学校時代からの様々な課題を抱えたまま入学してくる生徒や、幼少時代から周囲の環境に様々な課題をもつ生徒も多い。長年にわたり、低学力傾向であることと不登校・不適応の出現率が高いことが、本校（本校区内）の課題である。



写真1 ポスター

このような課題がある一方、人なつこく愛嬌がある生徒がたくさんいるのも本校の特徴である。部活動に熱心に取り組み、力を付ける生徒も多い。生徒会活動も盛んで、今年は「エコキャップ集め」に取り組んでいる。数か月の間に約12万個のキャップを集め、日本教育新聞社等主催・第13回ボランティアスピリットアワード「関西地区コミュニティ賞」を受賞した。



写真2 受賞記念品

本校の教育相談は、校内のシステムや関係機関との連携等、長きにわたる実践の中でその体制が整えられてきた。不登校生を支援する仕組みができてきているものの、不登校出現率に大きな変化はない。そこで、本校は今後どのような教育相談の取組が必要かを考えるため、これまでの取組を再点検し、実践内容や成果を見直すことで教育相談体制の再構築を図りたいと考えた。

イ 本校における教育相談の現状

(7) 生徒相談課の位置付けと構成員

生徒相談課は主に生活指導部や学校保健部と連携して活動しており、生徒相談課長を含む、各学年1名の相談課担当教員で構成している。

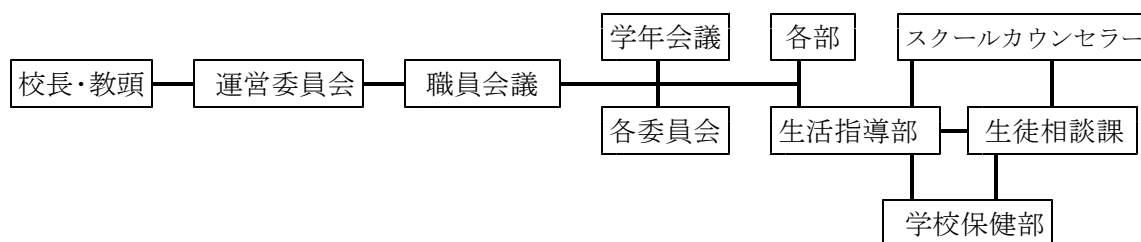


図1 校内組織

(イ) 生徒相談課の活動内容

a 生徒相談課会の定期的実施

週に1回、各学年担当者と養護教諭の4人で生徒相談課会を開く時間を確保し、情報を共有している。各学年から多くの生徒の情報が集まり、時間が足りなくなるため、学年担当は事前に資料をコピーして持ち寄るなど工夫している。不登校傾向の生徒に対する必要な支援、可能なチーム援助について、また、教職員全体の研修のニーズについて探り、提案している。この生徒相談課会が、相談担当者の相互研修の場にもなっている。

b スクールカウンセラーとの連絡会

スクールカウンセラー（以下、SCとする）の来校日には事前と事後の連絡会を実施し、相談担当からの情報提供とSCからの助言を中心に情報交換をすることで、カウンセリングをより効果的にしている。また、来校日の限られた時間の配分を、相談担当が連絡調整することで、生徒・保護者・教員すべてがカウンセリングやコンサルテーションを活用しやすいよう努めている。

c 研修・啓発の推進

1学期と2学期に各1回、全教員で、「気になる生徒の情報共有～理解と連携～」の研修を実施し、実態把握と情報の共有に努めている。また、SCの協力による全教員参加のカウンセリング研修や各学年研修を実施し、全教員が相談的な視点をもった生徒指導・支援のスキルを身に付けられるよう努めている。

d 教育相談活動

必要生徒に対する長期的な相談と併せて、全生徒を対象とした定期教育相談を各学期に実施し、学級担任がすべての生徒と個々に話をする時間をもてるようにしている。「まず話を聞くこと」「静かな話しやすい雰囲気」など、教育相談に当たっての学級担任としての参考事項を事前に示し、より良い相談活動になるよう配慮している。また、生徒には事前アンケートを実施し、それぞれの生徒について、現状や心持ちを少しでもよく理解した上で、教育相談に当たるように努めている。事後には、学級担任が「教育相談のまとめ」を書き、相談担当がその内容を把握して全体で共有している。この教育相談が、気になる生徒について学級担任がコンサルテーションを受けたり、そこから生徒本人がカウンセリングにつながるきっかけとなることも多い。また、保護者に対する支援として、カウンセリングの案内や、不登校（傾向）の子どもをもつ親の会「ひよっこ会」の開催をしている。

e 生徒相談室の整備・利用と別室登校生の対応

カウンセリングに用いる生徒相談室と、別室登校生徒の登校場所であるプレイルームを整備し、部屋が空いているときには全職員生徒や保護者との個別面談等に活用できるように、相談担当者が調整と管理をしている。また、別室登校生にはすべての教員で対応し、時間割りに担当時間を組み込み、円滑な運営と別室登校生の状態の把握に努めながら、相談担当者がその連絡調整をしている。



写真3 プレイルーム

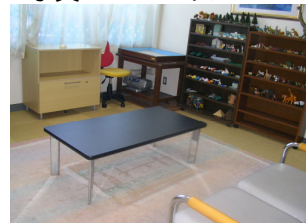


写真4 相談室

f 相談機関・関係機関との連携

SCや市の適応指導教室「わかば学級」、教育研究所の教育相談部の相談をはじめ、市や県の相談事業、NPO法人「都南地域教育振興会」など、各相談機関と随時連携している。その他にも、家庭こども相談センターや自立支援施設、保護課など、事例に応じて連携し

ながら支援に当たっている。

g 資料の整理・保管

生徒相談課会で情報交換に用いた資料はすべてファイリングし、新たな情報が加わったときや他の分掌から求められたときに活用する。研修資料についても同様である。収集・保管する資料を、次の支援の計画・立案につながるよう努めている。

以上の活動内容は、本校と校区内の5小学校で共通して取り組んでいる「相談業務7項目」に基づいている。相談業務7項目を図式化すると次のようになる。

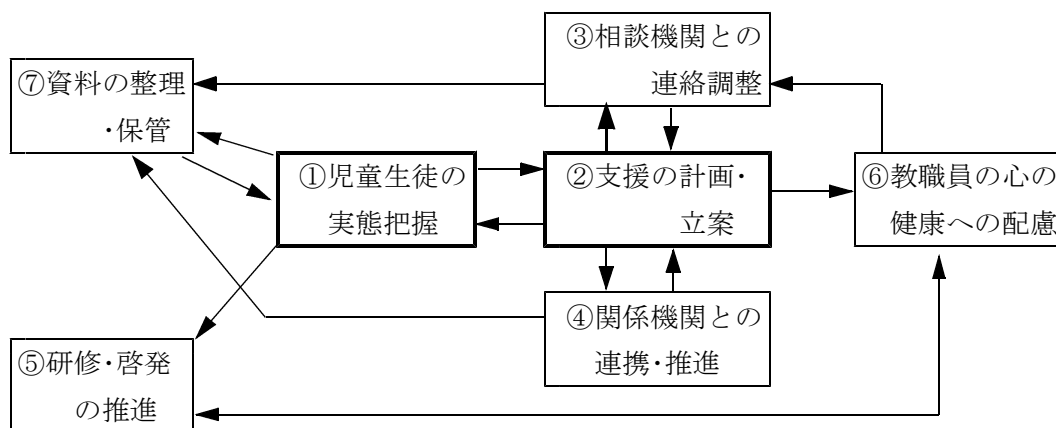


図2 相談業務7項目

ウ 取組の実際

(7) 小学校やNPO、地域との連携

本校の長年にわたる重点課題である「不登校」と「低学力傾向」は、中学校3年間だけで克服できるものではなく、小学校との連携が必要不可欠である。本校区ではこれまで様々な連携がとられてきた。

校区内に5つある小学校とは、人権教育推進教員を中心として早くから連携を進めていた。次ページの表1は、現行の連携ができるまでの主な取組をまとめたものである。具体的には、例えば、小学校の教員から「小学校の日々の取組が、中学校卒業後の進路に直接結びつくという実感がなかなかもてない。中学校の厳しい学力実態や進路結果を公表してもらえれば、多くの小学校教師の刺激になる。」という声があがったことをきっかけに、合同研修会でそれらを公表、5小1中全体で共有したり、中学校の立場から「小学校卒業までに身に付けておいてほしい力」をまとめて提示し、小学校から予想以上に好反応を得たりと、日常の教育活動に生かせる取組を重ねてきた。また、小中連絡会では「聞き取りメモ」を用いて、全員について丁寧な申し送りをしている。

これらの取組を進めるに当たり、校区で立ち上がったNPO法人「都南地域教育振興会」が果たしてきた役割は大きい。次ページの表2は、その設立の経緯と取組をまとめたものである。

(イ) チームによる個別支援の例

a 部活動という居場所が登校につながったYさんの事例

Yさんは入学と同時に部活動に入り、例年好成绩を収め、先輩後輩の関係も厳しい部で練習に励んできた。2年生の2学期半ばより登校しにくくなり、学級担任、相談担当者、

SC、保護者で相談の上、別室登校を始めた。意欲的に参加していた部活動も休むようになったが、

表1 連携の経緯

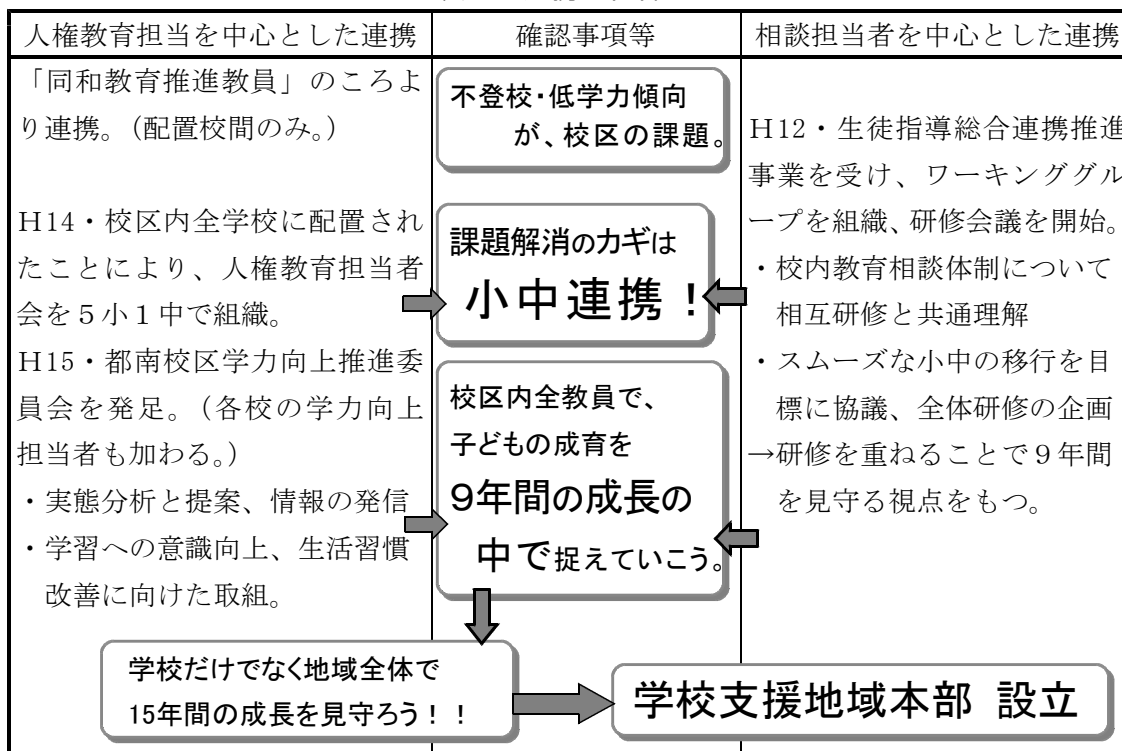


表2 NPO法人「都南地域教育振興会」設立の経緯と設立後の主な取組

年度	設立への動き・取組の内容等
H12	<p>「生徒指導総合連携推進事業」受託 (本校が文部省(当時)より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ「不登校児童・生徒への援助の在り方について」 ・推進委員会発足 (5小1中の各学校長とPTA会長を推進委員に。) ・地域スクールカウンセリング事業、各校担当教職員によるワーキンググループ研修開始。
H13	<p>推進委員会にて事業継続の必要性を確認 ➡ NPO法人設立を具体化 (学校内の問題に対し、小中及び地域が連携して対応する必要性を確認。)</p>
H14	<p>NPO法人「都南地域教育振興会」(都南は一とネット) 設立 (基盤をつくることで2年間の事業で培ったノウハウや内容の継続が可能に。)</p>
H15	<p>「NPO等と学校教育の連携の在り方についての実践研究事業」受託 (奈良市が文部科学省より)</p>
H17	<p>「不登校の対応におけるNPO等の活用に関する実践研究事業」受託 (奈良市が文部科学省より)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習支援事業開始 <p>第1回スマイルフェスタ開催 (中学校を会場に地域のイベントを初開催。)</p>
H18	<p>第2回スマイルフェスタ開催 (中学校生徒会や地域の諸団体の参加も増え、地域の輪が広がる。)</p>
H19~21	<p>主な取組を継続中</p>

顧問からの奨励もあり、休日の部活動には参加できた。3年生になってからも、部活には参加したいという思いで、どうにか別室登校している状況であった。部活動での実力は一、二を争うほどで、本人もそのことには自信と責任感をもっていた。3年の夏休みに開催された県の大会を良い成績で終え、2学期に入ってすぐの文化発表会を最後に部活動を引退した。それ以降も、時々欠席するものの、教室に登校している。

本校では、どの部も複数の顧問が、厳しく、優しく指導し、部員の学校生活全般を見守っている。この部の主顧問は、直接的な支援はもちろん、Yさんの身近にいる部員がYさんの支えとなるよう、周りの部員を育てた。日ごろから部員同士で支え合うことを求め続けていたからできたことである。母親も部の指導や支援、学級担任と顧問が連携した進路指導を心強く感じていた。

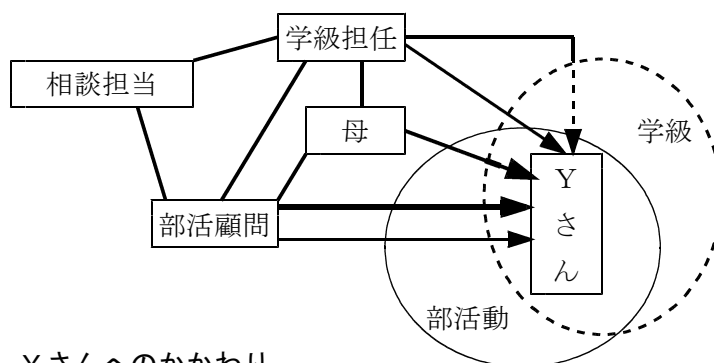


図3 Yさんへのかかわり

b NPO法人による支援事業を活用するSさんの事例

Sさんはコミュニケーション力が乏しく、小学校でもトラブルにあうことが多かった。保護者は初め、そのような現実を受け入れにくい状態であったが、小学校との相談を重ねる中で、5年生で校区のNPO法人「都南地域教育振興会」の実施する「家庭学習支援事業」を活用することにした。この時点で保護者はすでに複数回、地域SCと面会しており、地域SCも児童の状態を熟知していたため、支援が必要との判断や、支援スタッフの人選もスムーズに進み、2人の支援スタッフによるそれぞれ週1回の家庭学習支援が始まった。それから中学校卒業までの支援期間は、必要に応じて適宜、支援スタッフ2名と学級担任、相談担当、地域SCが集まり、現状と見通しについて情報の共有をした。

家庭学習支援スタッフとして活動するのは、臨床心理の勉強をしている学生である。この事業は、生徒はもちろん保護者の支援にもなっている。その背景にあるのは、地域SCによる相談体制をはじめとした、NPOと学校との連携という仕組みである。このような仕組みの中で、Sさんの保護者も冷静に、そして適切に、子どもの現状を理解し、将

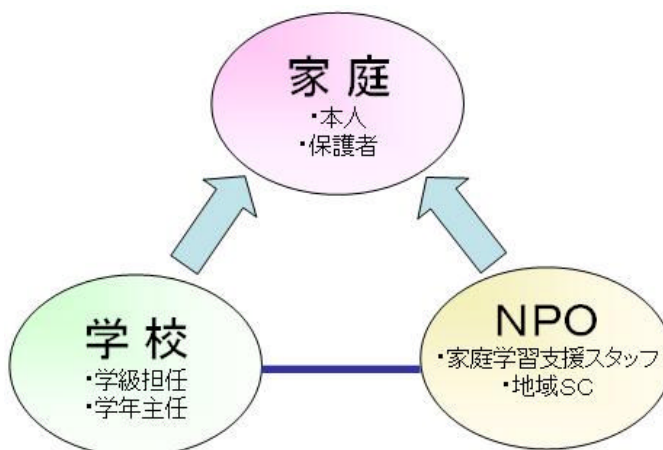


図4 Sさんへのかかわり

来像を描くことができるようになっていった。

この「家庭学習支援事業」については、これまでに3人の卒業生が高等学校に進学している。小学生で支援を受けていた児童が、元気に中学校に通った事例もある。

c 外部専門機関で相談を受けるKさんの事例

Kさんが不登校初期の1年生のときに、保護者がスクールカウンセリングを受けてみたが継続せず、学校だけでは支援が困難だった事例である。保護者は当時、不登校になった子どもに戸惑い、学級担任に頻繁に電話をし、明らかに実現不可能な要求をしたりしていた。

2年生になると、登校しても授業に参加できず落ち着きのない様子が見られるようになり、3年生になっても改善されなかった。そのころ教育研究所の来所相談に通うようになり、保護者はこれまでの心配や苦労、努力を聞いてもらいながら、本人へのかかわり方や支援の仕方を見いだしていき、親子関係も少しずつ変化していった。

2学期に、Kさんが仲の良い友達とのトラブルで怪我をするという出来事が起こり、保護者ら学年主任に、「怪我の痛み以上に心の傷が心配だ。」と相談があった。Kさんは学級担任には、ケンカをしたということしか話さなかったが、教育研究所の担当者には、学校では言いにくいこともいろいろ聞いてもらいながら、自分を見つめなおす時間をもつことができた。高等学校進学を希望するようになり、定期テストを受けたり、進路懇談をきっかけに生活態度を改善しようとする姿が見られ、卒業に向けて落ち着いた学校生活を送っている。

学級担任はKさんから信頼が得られているか不安を感じる時期もあったが、教育研究所と連携する中でKさん親子が自分を慕い、頼りにしていることが伝わり、自信をもって本人や保護者と接することができた。子どもが不登校になり精神的に追いつめられたが、そのことをうまく学校に伝えられない保護者と、学校が提供しようとする支援に溝があり、学校と家庭だけでは歯車がうまく回っていない状態を、外部機関の力を借りることで克服できた事例である。

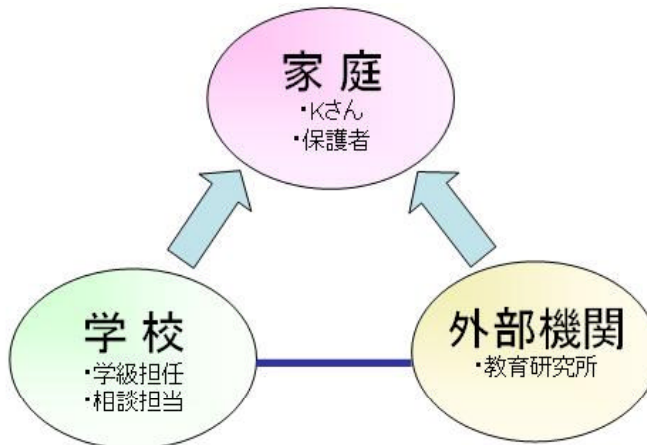


図5 Kさんへのかかわり

エ 成果と課題

今回、校内の教育相談体制や小学校との連携を振り返る中で、現行の取組が、長い年月にわたるきめ細かく丁寧な実践によって構築されたことを、また、地域連携については学校におけるいろいろな場面でそのニーズが生まれ、現在の幅広い分野での連携という形に至っていることが再確認できた。

NPO設立については、それに至る経緯も含め、現在の学校支援地域本部の理念そのものであり、地域連携の先駆けとなっていたと感じた。今後、地域の中でNPOがどのような役割を担っていくのか、現在、学校が活用しているNPOの事業がどのような形で継続されていくの

かを、見守るのではなく主体的にかかわりながら、地域との連携をより良いものにしていくことが課題である。

校内の取組では、不登校生徒への支援体制が整っているのに対し、不登校の予防となるような取組が十分ではなく、開発的な教育相談の取組を系統立てて取り入れる必要があることが分かった。学級担任が独自に考えて実施しているエンカウンター・エクササイズは多数ある。それを全体で共有し、特別活動課と連携して年間計画を作成し、全校の取組へ広げていくことが今後の課題である。さらに、研究課と連携してソーシャル・スキル・トレーニングに取り組むことも大切である。各分掌と連携しながら、不登校の予防となる取組を充実させていくことも課題である。

オ おわりに

冒頭に挙げた「エコキャップ集め運動」の「関西地区コミュニティ賞」は、校内だけでなく、地域の住民や店舗、保育園や幼稚園、小学校の協力を得られ、地域全体の活動に広まった点が評価されての受賞であった。これは、本校区の象徴的活動であると改めて感じた。今後も本校区が、全児童・生徒が健やかに育つ地域であり続けることに尽力できるよう、研鑽を積んでいきたい。

(3) 高等学校における取組

不登校児童生徒への援助の在り方

－定時制高等学校生徒における学校不適應克服の過程から－

奈良県立奈良朱雀高等学校（定時制）

教諭 北 口 嘉 憲

Kitaguchi Yoshinori

ア はじめに

筆者が勤務するのは夜間の定時制課程で、本年4月から、奈良商業高等学校定時制（ビジネス科）、奈良工業高等学校定時制（機械科）が完全統合し、両校の生徒が柏木校舎（旧奈良商業高等学校の校舎）で学んでいる。このように、機械科とビジネス科は、昨年度までは実質的には別の学校であったので、生徒指導、教科指導等の違いが両科生徒の雰囲気の色濃く反映されている。

また、定時制高等学校に共通することだと思われるが、学校不適應を引きずったまま入学してくる生徒が多く、入学後における本校の指導も中学校までの学校不適應の克服が中心となる。その中で学校不適應を克服し、新しい高等学校生活を通して、今までの学校生活でできなかったこと、経験しなかったことをやり直そうとする生徒もいるし、学業や資格取得に励み、無遅刻無欠席を目標に頑張っている生徒もいる。

彼らの変化は、生徒指導上の様々な知見を与えてくれるはずであり、これを整理することの必要性を感じていた。

イ 本調査の目的

依然として、不登校をはじめとする学校不適應を抱える児童生徒は多数報告されているが、彼らの中には自己の問題を克服していく者も相当いるのではないかと思われる。実際、筆者の担当するクラスには小・中学時代に不登校をはじめとした学校不適應にあった生徒が多いが、3年生となった今、在籍している生徒のほとんどがこの問題を克服しつつあり、順調な学校生活を送っている。このことは、本校に入学し学校生活を送る過程で、生徒の意識に変化が生じたことを意味しており、この立ち直りの過程を整理することで、不登校児童生徒の支援にかかわる多くの情報が得られると考えた。

そこで、本研究では、かつて不登校などの学校不適應にあった生徒が、それを克服していく過程について、各々の事例をまとめ上げることにした。そして、彼らの体験をもとに探索的な観点から学校不適應の克服要因を中心に、自己及び周囲に対する意識の変化を検討し、不登校児童生徒の支援における新たな視点を獲得できると考えた。

また、学校不適應とは、学校における児童生徒の様々な不適應状態や行動を示す裾野の広い概念であり、不登校やその予備的状況をも内包している。

福島県教育センター教育相談部(1993)では、これを「学校環境と児童生徒の間に不調和が生じ、緊張や葛藤が生まれ、問題が発生しやすい状態」とし、さらに「集団の中に自分の存在を感得できなかつたり、集団の中に予測する自分の役割行動が実現できず、または、集団の中で役割行動が発揮できないと感じ、本来の自分の個性を引き出せないでいることで、自己実現に向かう働きが停滞した状態である」ととらえている。本調査においても、このとら

えを学校不適応の概念として定義した。

ウ 調査及び分析方法

(7) 面接対象生徒について

筆者が担当する機械科第3学年のクラス全生徒17名について面接を行った。いずれの生徒も入学以前は様々な問題を抱えていたが、現在、それらを克服しつつ卒業へ向け順調な学校生活を送っている。

(4) 面接について

一人当たり15分程度の半構造化面接を、2009年9月から10月にかけて対象生徒に行った。半構造化面接とは基本的な質問から聞き取りを始めながらも、話の展開に制約をかけず、あらかじめ予測のできない話や話題が出てくることを予期あるいは期待し、そうした自由な展開の中から、テーマに関する重要で本質的な事柄を見いだそうとするものである。また、面接の記録については、教育現場で行うため、テープレコーダーへの録音は不適切と判断し、面接中にメモをとることで逐語録を作成した。

(5) 質問内容

生徒本人の「頑張っている」という意識を尊重しつつ自分の軌跡を振り返らせるため、「なぜ、今、頑張れているのか？」という一点に絞って質問した。ただし、自己洞察を円滑に行い濃密な内容を得るため、半構造化面接の特長を生かし、質問の意図が変わらない限り臨機応変に面接を進めた。

(6) 分析方法

本研究においては、まず、不適応克服の要因を見いだすことが第一の目的であるので、各々の生徒の逐語録から、その要因に関する様々な具体例（バリエーション）を取り上げ、それらをまとめ、概念として昇華させた。そして、その概念をまとめ、上位にカテゴリーを作り要因を整理し、それについて検討を行った。なお、概念及びカテゴリーの生成については木下（2007）の手法を参考にした。

エ 調査結果

(7) 概念とカテゴリーについて

調査の結果、次ページの表1に示すように、逐語録から〈友人関係の充実〉、〈新しい人間関係との出会い〉、〈興味・関心の共有〉、〈友人関係の落ち着き〉、〈経験・立場の共有〉、〈親に対する気遣い〉、〈経済事情の自覚〉、〈将来に対する意識〉、〈心の成長〉、〈就労体験の影響〉、〈専門教科への関心〉、〈授業理解への自信〉、〈少人数のクラス〉、〈夕方からの授業〉、〈通学のしやすさ〉、〈個に焦点をあてた取組〉、〈進級システムに対する緊張〉という17の概念が見いだされた。そして、それを【対人関係構築の成功】、【家族・家庭への関心】、【社会参加への準備】、【学習の充実】、【学校における諸条件との適合】、【学校の制度や取組の効果】という7つのカテゴリーにまとめ、最終的に《内面における充実》、《外的条件との適合》という2つのコア・カテゴリーに整理した。このコア・カテゴリーとはカテゴリーをまとめ上げた、より上位に位置するものである。

このことから、生徒たちは現在の学校適応について、内容に個人差はあるものの、《内面の充実》と《外的条件との適合》により、もたらされていると感じていることが判明した。

表1 概念・カテゴリーの一覧

コア・カテゴリー	カテゴリー	概念	定義	代表的な具体例(バリエーション)
内面における充実	対人関係構築の成功	友人関係の充実	友人との関係の充実が登校し、頑張る活力になっているということ	* 友達と一緒になんかやれてゆうか…友達との関係があったから生徒会もやってるし。* その後、友達が来て、学校に行くのが楽しみになってきた。* 友達が受け入れてくれるので、その心配がないから
		新しい人間関係との出会い	高校入学による新しい友人により、触発を受けたり、居心地の良さを感じるということ	* 今の友達は、やりたがる子が多いから。* まわりの子が楽しいから。何か、いろいろなところから、みんな集まってるやん。それが面白い。
		興味・関心の共有	クラスに自分と同じ趣味をもつものがあり、それが学校における居場所づくりに役立っている	* うまいこと趣味が合ったんですね。みんなが休み時間にゲームをしていて、それが僕もしているゲームだったので。あと、反発することがない。「お前、なんやねん」みたいなのがない。* 今が楽しいですね、アルバイトとかで。あと、バイクでツーリングする仲間もいる。
		友人関係の落ち着き	以前は友人たちの影響を受け、問題行動や学校不応適をおこしていたが、高校入学によりその関係が変化し、改善に向かったということ	* つきあう人が違うから。まわりを見ても、悪い事をしている人が多かつた。でも、今は真面目なやつが多いし…彼女も…。僕のまわりが、バイトとかして全員落ち着いた。* 中学校時代は、そんな友人も多かつたし、一緒になってやっつた。友達のせいではないけど。
		経験・立場の共有	周囲の人間がつまずきや傷付きなど、自分と同じような経験をしていたり、立場であることに安堵感を感じるということ	* あと、やっぱ、似たような感じの人が集まっているから。
	関心族・家庭への	親に対する気遣い	親に今まで迷惑や心配をかけており、安心させたいという気持ち	* 親とか…一人っ子やし。* お父さんの理解があったからうまくいっている。* 親のおかげやったりするかもしれないけど…分かん。中学校の時、相当迷惑をかけたから…最近、なんか考えたら、親に嘘つきの嫌やし…学校行ってたって、嘘つのがいらんから
		経済事情の自覚	家庭の経済状況を自覚し、働かなくてはいけないという気持ちが現在の頑張りを生んでいる	* やっぱ、お金を稼ぐ。* なんでやらな…雇って貰っているから、そんな顔してたら、首切られてもあかんし、生活がかかっているから
	社会参加への準備	将来に対する意識	自分の将来に対する漠然とした不安や希望。数年後に就職が控えているという自覚	* それと、将来の事とかあるじゃないですか。学校を卒業して、就職とか。* 進路…専門学校に行きたいから…はい、そう思います。
		心の成長	加齢や体験による精神面での成長。以前の自分の行動について内省的な思考をもつようになる	* 理由は無いけど…大人になつたのかな。よう分からん。悪い事…無免許とか…何か…そんな事が恥ずかしいと思えるようになった。中学校の時の事を思うと恥ずかしい。* さあ、大人やから…成長したから…
		就労体験の影響	仕事やアルバイトにおける就労体験を通して、社会のルールやその厳しさ、そして責任や充実を感じ、生活にプラスの影響を与えている	* 今が楽しいですね、アルバイトとかで。* ちゃんと来て、当たり前やしな…。生活のリズムがそうなるから…仕事があるし。* 環境が変わった。何か仕事をしているから…社会のルールを知ったから、前より丸くなった感じがする。トンガリがなくなった。
外的条件との適合	学習の充実	専門教科への関心	高校に入学して、初めて出会った専門教科に興味関心を持ち学習意欲をかきたてている	* ここでは、鉄を削ったり…加工とか、鍛造とかが出来て、おもしろかったから。* あとは、授業の内容が分かりやすいし、機械科ならではの授業が楽しい。新鮮なジャンルやつたし、ものが出来るのがおもしろいから。
		授業理解への自信	授業内容が理解できるようになり、学習意欲が生まれ、学校生活に充実感や自信を与えている	* 勉強が分かって楽しいから。今のクラスが楽しい。主なのは楽しいから。* 好きな授業とかはもちろんやるんやけど、最近は嫌いな授業も頑張れる。それで、テストで点が取れたから、ますますやる気になる。
	適学高校における諸条件との	少人数のクラス	中学と異なり、少人数であるからこそ適応しやすいということ	* 中学校と違って、規模が小さくなった分だけやりやすかったかもしれない。これが、定時制のいいところかも。* 人数が少ないので、先生とも仲良くなれるからだと思う。人数が少ないから、先生もみんなの顔を覚えられるし。
		夕方からの授業	夜型の生活に順応しているため、夕方からの授業であるからこそ、きっちりと登校できる	* 自分の夜型の生活にあっているかなと思って。* 一番は、朝が苦手で、起きるのがめんどくさい。* 朝起きるのが苦手で、朝起きるのが遅れたりとかしていたけど…。
	通学のしやすさ	通学距離が短くなったり、通学手段が便利になったりして、登校しやすくなった	* 家が遠かったのと、自転車通学が出来へんかったし* こっちの学校に来てから、家から近くなってサボる気があまりなくなった。	
組学の校効果や取組	個に焦点をあてた取組	定時制における、学校不応適を前提とした教師の個を重視した取組に対する生徒の信頼・安心感	* いろいろな先生の支えもあるし…。* 友達もおるし、先生も楽しい。気が合うの…普通に話が出来る。* 定時の先生やったら、枠が広くて、そこから外れたら怒るけど、全日では枠にはまっても怒られそうな気がする。	
	進級システムに対する緊張	中学校と異なり、成績や出席に問題があると進級や卒業が出来ないという厳しい現実を感じていること	* 中学校とちやうから…高校やし。* やっぱ、中学校と違って勉強せんと進級できへん。まあ、そんな感じで。* 中学校とは違うし、義務教育やないし、そろそろやらあかんという感じ。* 留年したくないから。あとは…特にない。	

(イ) 克服要因について

過去の不応適状態に応じて、17名の生徒（A～Q）を過去の出席状況から〔不登校・不登校傾向群〕、〔遅刻・早退を主な問題とした群〕、〔出席状況に問題が見られなかった群〕に分類し、適応克服要因としての各概念との関係性に注目した。

〔不登校・不登校傾向群〕は文部科学省が定める不登校であった生徒に加えて、年間30日近く欠席した生徒も含めた。この群ではエネルギーの乏しい印象の生徒が多い。

〔遅刻・早退を主な問題とした群〕は他群に比べエネルギーの高い生徒が多く、友人と共に行動するのが特徴で、遊んで昼から登校したり、登校しても教室に入らず校内を徘徊していた生徒たちである。

〔出席状況に問題が見られなかった群〕については、出席状況には特に問題が見られない

生徒である。この群でも、学校生活における無気力さは他群と同様に見受けられた。ある生徒の「中学校は勉強もしていなかったし、行っているだけで、いいや、という感じやった」という語りからも、消極さが目立ち、学校生活において疎外感を感じていたような印象を受けた。この群も決して学校生活に順応していたわけではなく、前二群と紙一重の状態であったのだと思われた。

a 対人関係を主とした克服

各生徒の面接内容と対人関係を主とした《内面の充実》における概念との対応を表2に示す。

ほとんどの生徒が〈友人関係の充実〉を語っており、このことから、自分の居場所を確保するためには、気楽に話すことができ、一緒にいて安心できる友人の存在は欠かせないということが改めて確認できた。

また、〔遅刻・

表2 対人関係を主とした《内面の充実》

早退を主な問題とした群〕と〔出席状況に問題が見られなかった群〕の両群では、対人関係に関する様々な要因を確認できるが、〔不登校・不登校傾向群〕については〈友人関係の充実〉に集中しており、他の要因はほとんど確認されない。

		対人関係構築の成功				
		友人関係の充実	新しい人間関係との出会い	興味・関心の共有	友人関係の落ち着き	経験・立場の共有
不登校・不登校傾向群	B	○				
	C	○	○	○		
	F	○				
	H	○				
	I	○	○			
	J	○				
遅刻・早退を主な問題とした群	D					
	E	○	○		○	
	M	○			○	
	N	○			○	
	P	○				
	Q				○	
出席状況に問題が見られなかった群	A	○	○			
	G	○		○		
	K	○	○	○		○
	L					
	O	○		○		

〈友人関係の落ち着き〉については、〔遅刻・早退を主な問題とした群〕の生徒6名中4名から語られ、友人関係に問題があったと振り返っており、過去の非行傾向を反映していると考えられる。

-Cの事例から-

Cは中学時代、いじめにあい、対人関係が未熟なまま本校に入学した。そのため、保護者はCが高等学校生活を始められるかどうか非常に強い不安を感じていた。Cは線の細さを感じるおとなしい生徒で、周囲の生徒と特に話すこともなく、入学当初は生徒数も多かったこともあり、周囲に埋没してしまう状態であった。しかし、3学期になると早めに登校しては、ゲームをするグループができ、ゲームが大好きであったCは、そのグループに混じってゲームをするようになった。そのグループのメンバーには、過去に不登校を経験した者もあり、互いに共感できたのか関係は親密化していった。そして、Cはそのグループの中で談笑するようになり、校外でも友達と遊ぶようになったので、保護者もその変貌ぶりに驚いていた。クラスの他のグループも、Cに対して特に余計な干渉をすることもな

く、Cは所属するグループに守られていると感じていたようである。また、第2学年に進級して間もなく、Cの得意とする絵がクラスで大きく取り上げられるようなことがあり、そのうまさはクラスの生徒皆が認めるところとなった。そして、このころからクラスも落ち着きはじめ、生徒たちにも余裕ができたのか、夏休みに行ったクラスイベント、体育大会、文化祭などの行事を通してグループ同士の交流も見られるようになり、クラスの中で“楽しみたい”というエネルギーが感じられるようになった。そのエネルギーに触発されたのか、Cは学校行事において、自ら進んで生徒会を手伝い、他の学年との交流も経験した。そして、集団活動の楽しさがクラスに浸透するようになり、Cの所属するグループから、クラスイベントの企画が提案されることもあった。このようにクラスのエネルギーは高まり、その雰囲気の中でCは現在も学校生活に意欲的に取り組んでおり、他の生徒が嫌がるような仕事も進んで引き受けてくれるようになった。本調査における面接時にも「うまくいっているのは学校だけ」と冷静に自己分析しつつ、「このクラスには受け入れてもらえるような感じがある」と答えている。

〈小括〉

筆者は学級担任として、Cのような生徒が安心してクラスに存在できるような取組を意識してきた。特に、皆が授業にきっちり取り組み、生徒間での問題が生まれにくく、そして一部の生徒たちのためにクラスが揺れないよう、クラスの枠組みづくりを重視した。それと同時に、生徒が“一人よりも、クラスでやるともっと楽しい”と感じ、エネルギーが高まるようクラスイベントを企画したり、体育大会や文化祭等の参加に際しても、そのような雰囲気づくりを重視してきた。

この事例からは、趣味を通しての狭い友人関係を基盤とした居場所の確保を機に、関係がクラスへと広がり、そのエネルギーを受けながら不適応を克服していった流れや、学校行事等を通してクラスにおける自己の存在を感じることに、他者から認められることの大切さが理解できる。

b 対人関係以外の《内面の充実》における克服

各生徒の面接内容と対人関係以外の《内面の充実》における概念との対応を表3に示す。

この表において、特徴的であるのは〔遅刻・早退を主な問題とした群〕と〔出席状況に問題が見られなかった群〕の生徒について、【家庭・家族に対する関心】、【社会参加への準備】に関するものが、数多く語られていたことである。

一方、〔不登校・不登校傾向群〕では、このような様子が面接において、ほとんど語られることはなかった。

-Pの事例から-

Pは中学時代、昼夜逆転の生活をしてきたためか、朝、起きることができず、欠席は少ないものの日常的に遅刻をしていた。また、「今に比べたら、ようキレとった・・・怒とったような気がする。知っている子としか・・・友達としかかかわらんかった」と当時を振り返っており、本人も満足できる生活ではなかった様子がうかがえる。

Pは入学当初から、親の勧めもあって仕事に就いていた。朝7時に家を出、午後4時に仕事が終わると学校へ直行し、帰宅すると深夜11時前になることもあるという。このような、厳しい生活を送りながらも、出席状況は極めて良好であり、仕事や学校生活に充実を感じていると言う。学習面についても、もともと勉強が嫌いで、授業中の居眠りはよく見

かけるが、機械実習などでは仕事で疲れているにもかかわらず熱心に取り組んでいる。本人も自分の変化を自覚しており、仕事が自分を変えたと感じている。面接時には「環境が変わった。何か仕事を

表3 対人関係以外の《内面の充実》

		家族・家庭に対する関心		社会参加への準備		
		親に対する気遣い	経済事情の自覚	将来に対する意識	心の成長	就労体験の影響
不登校・不登校傾向群	B					
	C					
	F					
	H					
	I					
	J				○	
と遅刻・早退を主な問題とした群	D	○				
	E			○	○	
	M	○				
	N					
	P		○	○	○	○
	Q	○				
見られなかつた問題が出席状況に問題が	A					
	G	○		○		
	K			○		○
	L		○			○
	O					○

いらん人の下についたからかな・・・好き嫌いが言えへん年になったのかもしれない。」「仕事をやって

いるから変わったと思うけど・・・先輩へのマナーというか、敬うように言われるし、礼儀を知れと先輩にも親にも言われる。今までは、自分勝手にやってきたけど、まわりのことも考えられるようになった。」など、社会参加による意識の変革が語られている。

〈小括〉
この経過からは、仕事において様々なことが強いられ、それを受け入れていく過程で生徒の中に社会性が生まれ、さらに仕事の成功や失敗体験等から自己の成長が促進されることで不適応を克服していった流れが理解できる。筆者は学級担任として、欠席・遅刻もせず、仕事と学校を両立している大変さを理解し、努力を認め、本人、保護者にそれを伝えるように心がけた。そして、クラスにおいても、Pの頑張りをクラス全体で認められるよう、ホームルーム等で取り上げたりもした。この事例では、仕事を始めることにより成長が促進され、学校がそれを支える役割を担ったと言える。

c 外的条件における克服

各生徒の面接内容と《外的条件との適合》における概念との対応を表4に示す。

この表において、最も注目するのは【学習の充実】において、どの群の生徒についても〈授業理解への自信〉が語られていることであり、17名中7名とその数も多い。このことから、どの群の生徒も学力不足に悩み、不適応の潜在的要因になっていたことがうかがえる。そして、以上のことから不適応克服における、学力保障及び自尊心回復の重要性を再認識させられた。

【学習における諸条件との適合】については、〔不登校・不登校傾向群〕の生徒が、他群の生徒と比較して数多く語っている。このことから、〔不登校・不登校傾向群〕の生徒にとって、クラス、校時、通学などの条件整備は思った以上に重要なことだと考えられる。

【学校の制度や取組の効果】では、〈個に焦点をあてた取組〉、〈進級システムに対する緊張〉が多くの生徒から語られている。〈個に焦点をあてた取組〉とは、学年やクラスという集団より生徒一人一人にスポットをあてた取組のことで、生徒一人一人の指導から始めるという定時制高等学校の実態が、本クラスの生徒たちには適合していたのだと考えられる。

表4 《外的条件との適合》

		学習の充実		学校における諸条件との適合			学校の制度や取組の効果	
		専門教科への関心	授業理解への自信	少人数のクラス	夕方からの授業	通学のしやすさ	個に焦点をあてた取組	進級システムに対する緊張
不登校・不登校傾向群	B	○			○			
	C							
	F	○	○		○			○
	H		○		○		○	
	I		○	○		○	○	
	J					○	○	
と遅刻・早退を主な問題とした群	D							○
	E							○
	M		○		○			○
	N		○		○			○
	P						○	
	Q							○
見られなかつた群	A			○				
	G		○				○	
	K		○				○	
	L							○
	O							

やはり、不適応克服には、生徒個別のきめ細やかな対応が求められるのかもしれない。一方、〈進級システムに対する緊張〉は〈個に焦点をあてた取組〉と対極にあるような強制にかかわる概念であり、〔遅刻・早退を主な問題とした群〕の生徒のほとんどから語られている。この群の生徒は軽度の非行行動や怠学の傾向があり、このような生徒には、高等学校の進級制度が抑止力として機能していることが分かる。その一方で、〔不登校・不登校傾向群〕、〔出席状況に問題が見られなかつた群〕では、ほとんど語られておらず、克服要因としてあまり意識されていない様子である。

- I の事例から -

I は中学時代、不登校であった。入学時、物静かであるがしっかりとした印象の生徒であったので、保護者からこれを聞いたとき筆者は意外に感じた。I は中学時代に、いじめの経験や交友関係のトラブルも特になかったが、だんだんと勉強が分からなくなり、それに伴って学校に行くのがおっくうになり、とりたてて原因はないが“なんとなく”休むようになった。友達からも、学校へ来るように誘われていたが、休みが続くと登校しにくくなり、“面倒くささ”に負けることが続いて不登校に至った様子であった。

I は入学当初から、出席状況は非常に良好で、成績もトップクラスであり、現在もこれを維持している。これについて、I は面接で、「勉強が分かったら楽しい。しんどいけど、頑張った分だけテストの点に出るから・・・成績に出る」と、勉強が分からないというコンプレックスから解放された喜びを語り、自分はやればできるという自信が感じられた。

そして、この自信がプラスの連鎖を生んでいったようで、2年生になるとクラス役員に立候補し、交友関係も広く、明るく活発な印象の生徒に変貌した。Iは今の学校生活について、「ただ、ほんまに楽しいから」と表現し、その要因として、前述した学習の充実感の他に「人数が少ないので、先生とも仲良くなれるからだと思う。人数が少ないから、先生もみんなの顔を覚えられるし・・・定時やからというのが大きい。全日ではなかったと思う」と語っている。また、Iの学校生活の中で楽しもう、頑張ろうとする姿を見ていると、中学時代にできなかったことをやり直そうとしているような印象も受ける。そして、面接の最後に「何かゆとりができた。高等学校に入ってから」と語った。

〈小括〉

この経過からは、授業が理解でき、テストで高得点が取れたことを機に学習に対する自信や意欲をもつようになり、それを基盤に不適応を克服していった様子が見えてくる。また、筆者は学級担任としてIの自信や意欲を高めるため、面談等で本人と共に努力と成果を確認し、それを十分に認めるよう心がけた。そして、自信や意欲を学習以外にも広げるため、生徒会活動や学校行事への参加を促した。

オ 考察

調査結果について、カテゴリー及び各群生徒の特徴に注目し、この2つの視点から特に印象深いものについて考察を行った。

(7) カテゴリーから：〈友人関係の充実〉のとらえ方

Cの事例を踏まえ、本クラスの流れから〈友人関係の充実〉を考えてみる。本クラスは入学当初、2～4人の閉じた友達グループにより構成され、それぞれのグループが他のグループに対して無関心もしくは否定的な雰囲気、クラスとしてのまとまりは見られなかった。しかし、学年の進行とともに、そのグループ間の垣根が徐々にとれ、現在ではクラス全体で何かやりたい、楽しみたいというような要求を、学級担任として強く感じるようになった。そして、このことや生徒の語りから、生徒たちが求めている〈友人関係の充実〉とは個対個のことではなく、個対クラスにおける関係の充実を意味しているように思われた。不適応克服には生徒一人一人が、「クラスから認められた（承認）」、「居場所を確保できた（所属感）」と感じられるようなクラスの雰囲気づくりが重要であると再認識させられた。

(4) 各群生徒の特徴から：〔不登校・不登校傾向群〕生徒の特徴

〔不登校・不登校傾向群〕からは、《内面の充実》において〈友人関係の充実〉以外の要因がほとんど語られなかった。このことについて、サンプル数の問題から統計的判断は難しいが、学級担任として生徒の日常を見ている中では、他群の結果とこれほど顕著な差が出ることは意外であった。実際、〔不登校・不登校傾向群〕の生徒についても、アルバイトを継続し、家族を心配し大切にしている生徒も多く、これらが本人の心理的成長に貢献している様子も見受けられる。しかし、これらが語られないということは、彼らは自己の振り返りが不得意であったり、興味・関心の幅が狭いということが考えられ、また、関心のあること（例えば友達関係）に意識が集中してしまい、それ以外のことに目が向きにくいような傾向を有していることも考えられる。そして、それが面接の語りにも反映されてしまったのかもしれない。また、彼らのこのような特徴が、過去の問題をより深刻なものにしてきたとも想像できる。伊坂(2006)は不登校児童・生徒の特徴として、真面目で一生懸命であるが、考え方に柔軟性が乏しく、自分のこだわりから抜け出しにくいとしているが、前述した筆者の印象と一致すると

ころがある。

カ 研究の成果

調査結果を整理する中で、今まで経験的に感じていた不適応克服の要因が明確なものとなった。これらは定時制高等学校の1クラスについて明らかになったものだが、不登校児童生徒の支援及び予防的なかわりに適用できるものも数多くあると思われる。

また、文部科学省初等中等教育局児童生徒課（2003）にある“不登校とならないための魅力ある学校づくり”では『『心の居場所』『絆づくり』の場としての学校』、「安心して通うことのできる学校の実現」、「学ぶ意欲をはぐくむ指導の充実」、「習熟度別の指導や基礎学力の定着へ向けたきめ細かい教科指導の実地」が挙げられているなど、不登校生徒児童への支援において、すでに提言や実践されてきたものが数多く含まれている。これら内容は本研究のいくつかの概念と類似しており、結果として得られた内容はこれらの有効性を支持するものとも言える。そこで、本調査の結果から特に重要だと感じたことを改めて提案したい。

(7) クラスの力（【対人関係構築の成功】から）

生徒の語りから、〈友人関係の充実〉が自分たちの頑張りに最も必要な条件であると感じていることが伝わってくる。また、その〈友人関係の充実〉は、個対クラスにおける充実であることも分かった。このことから、クラスのエネルギーを受けて生徒一人一人が成長するような雰囲気づくりが大切かと思われる。そして、それにはクラスにおけるエネルギーの活性化とまとまりが必要であり、これらがうまく機能する必要があると思われる。エネルギーの活性化については、利用できる資源が学校には豊富にあり、体育大会、文化祭、修学旅行等の学校行事の取組の工夫により、大いに期待できるであろう。また、クラスの生徒たちと共にクラス独自のイベントの企画も有効かもしれない。そして、クラスのまとまりづくりの土台となるのが教師と生徒の適正な人間関係の構築であると考え。それに加えて、構成的グループエンカウンター等の心理教育に代表される、生徒自身の心理的成長と安定をもたらす社会的なスキルの向上を目指すような取組も有効かと思われる。

(4) 学校外における社会的資源の活用（【社会参加への準備】から）

人はだれもが他者から認められる場を欲しており、そこに所属することを望む。そして、それは成功や失敗体験を繰り返し、自己が成長する中で達成されていくものだと考える。生徒にとって、クラスがこれを実現する場所であることが望ましい。しかし、Pのように仕事を通して社会の現実を直視し、成長が促進される中で職場にこのような場所を見つけ、学校における不適応克服にプラスの影響を与えた例もある。また、適応指導教室やフリースクールでもこのような機能を果たしていると思われるが、社会にはこれらの場所以外にも資源が数多く存在するはずであり、本人の状況や興味に合わせて、それを見いだす支援も重要だと考える。

本校秋篠校舎において、昨年度まで、地元自治会の方々と本校の生徒有志が合同で防犯パトロールを行っていた。この取組に本クラスの生徒も多数参加しており、お年寄りや子どもたちとのふれあいの中で、社会とのつながりや、そこで認められることの喜びを感じた様子であった。この体験は、彼らの成長に大きく寄与したのではないかと考えている。

(4) 学習における自尊心の回復（【学習の充実】、【学校の制度や取組の効果】から）

〈授業理解への自信〉も多くの生徒から語られており、授業が理解できないことの劣等感はいわゆる我々が思う以上に生徒たちにとっては大きなものなのだろう。彼らは、学ぶ喜びを感じるこ

とができず、理解できないと劣等感をもつことが不適應の一因となっていたのではないのだろうか。そこで、学習においても自尊心を回復させるための取組が重要になると思われる。調査の対象となった生徒たちにおいては、習熟度に照らし合わせた学習内容の精選、少人数での授業、教材の工夫、実習をはじめとした体験型の学習といった実業系定時制高等学校ならではの取組が効果的に機能した様子であった。

キ おわりに

森田（2003）は、個人が社会や集団や組織や教育などの制度体、あるいは他者との関係に対して形成する「紐帯」^{ちゆうたい}をソーシャルボンドと呼び、不登校は、人が社会的な場面で集団や制度や人との関係ないしはかかわりを取り結んでいくときに現れた、その不適合状態としている。今回の面接で、生徒たちから出てきた生の声には、ソーシャルボンドを形成するもの、もしくはソーシャルボンドそのものが数多く語られていたと思う。筆者は定時制課程で幾度も卒業生を送り出してきたが、その都度、入学時の不適應状態がどのような過程を経て改善されたのか、また、どのような取組が有効であったのか考えてきた。本調査を進める中で、これについて単なる印象であったものが整理され、確信できるものとなった。今後、この結果を基に、学級担任として現クラスさらに今後受け持つクラスへ還元し、生徒が学校と結ぶ「紐帯」、ひいては今後所属していく社会との「紐帯」を強化できればと考える。

4 まとめ

平成21年度は、不登校児童生徒への援助の在り方をテーマに小学校・中学校・定時制高等学校において実践的研究を進めてきた。各学校の実践から、見えてきた成果と課題は次のとおりである。

(1) 成果

ア 学校の課題を明確にする

小学校の実践では、組織的な不登校対策が行われていない現状に立ち、効果的な組織運営について検討するため、職員へのアンケートを実施した。アンケートからは、学級担任の精神的負担の軽減となる援助内容は何かを探ることができた。

中学校の実践では、重点課題である不登校と低学力傾向を克服するためには、校内の教育相談体制の充実だけでなく、小中連携を含め中学校区全体で取り組むべき課題として位置付け、家庭や地域の教育力を高めることの必要性を確認し、取組を進めることができた。

高等学校の実践では、定時制高等学校としての大きな課題である学校不適應について、その克服に向けた立ち直りの過程を、事例を基にして分析し、不登校克服のための方向性を導き出すことができた。

このように、取組を始める前に、小学校・中学校・定時制高等学校の各校種の特性や各学校の特色、地域性などをしっかりと見つけ、取り組むべき課題を整理し、明確にすることが必要である。

イ 子どもの実態を知る

小学校の実践では、学校評価からストレスを抱えている子どもの実態が浮かび上がり、リラクゼーションの試行やストレスマネジメント教育を授業に取り入れることができた。また、過去の改善事例や登校渋りの事例からは、外部専門機関や校内の人的資源を活用したチーム援助など、校内外の協働体制による組織的な運用について検討を図れた。

中学校の実践では、不登校問題と厳しい学力実態について、中学校区全体で分析を進めたことにより、教育相談体制の共通理解と相互研修や、学習意識の向上と生活習慣改善に向けた取組を行い、子どもの成育を9年間の成長の中でとらえることにより9年間の見守りの体制が構築できた。また、部活動という居場所から自信を取り戻した事例や、地域や外部専門機関との連携による援助が生かされた事例などから、教育相談体制における効果的な支援の在り方が再確認できた。

高等学校の実践では、不登校克服の要因を探るために、生徒一人一人と面接を行い丁寧な聞き取りをする中で見いだされたものを整理し、〈内面における充実〉と〈外的条件との適合〉の2つから分析を進めた。その中で、過去の出席状況から〔不登校・不登校傾向群〕、〔遅刻・早退を主な問題とした群〕、〔出席状態に問題が見られなかった群〕に分類し事例を基に研究を進めたところ、友人関係の充実や学習の充実、学校や社会における所属感・承認などといったものが不登校克服の要因となったことが明確になった。

このように、不登校児童生徒への援助を進めるためには、発達段階を踏まえた上で、学校全体と児童生徒一人一人の実態を知ることから始めることが何よりも必要である。

(2) 課題と今後の展望

今回の各学校の取組を通して、各学校が抱える課題を明確にし子どもの実態を十分に知ることが、不登校児童生徒への効果的な取組につながる事が確かめられた。

本研究では、不登校児童生徒への援助の在り方について研究を進めてきたが、子どもたちが不登校以外にも、様々な課題に直面したときに、自分自身で乗り越えられるような力を育んでいくことが大切である。そのためには、すべての教師が、様々な課題に向けた援助の在り方を追究していくことや、学校カウンセリングの有用性を認識するとともに、開発的教育相談における知識を理解することや効果的な指導のためのスキルを向上させることが必要である。

その一方で、教育相談担当者が、集団を育てる構成的グループエンカウターのエクササイズやソーシャルスキルトレーニング、ストレスマネジメントなどの心理教育的援助を、児童生徒の実態に応じて、学校行事や各教科と関連した取組を年間学習計画に組み入れ、系統的・計画的に進めることが大切である。

また、各校種・各学校の実態やニーズに即した教育相談体制を整備し、その中核となる組織の調整役・コーディネーターをしっかりと位置付け、校内外の連携を深めながらチーム援助となる協働体制の強化を図ることも重要である。

今後も個に応じた取組と集団を高める取組を継続して、不登校児童生徒への効果的な援助の在り方を追究しながら、学校教育相談のさらなる充実を目指していきたい。

参考・引用文献

- (1) ストレスマネジメント教育研究会(2009) 『ストレスマネジメント フォキッズ』東山書房
- (2) 奈良県教育委員会(2008) 『子どものストレスに関する調査結果』
- (3) 木下康仁(2007) 『ライブ講義 M-G-T-Aー実践的質的研究法』弘文堂
- (4) 福島県教育センター(1993) 『学校不適応児童生徒への援助の在り方に関する研究』
- (5) 福島県教育センター研究紀要第96号
- (6) 伊坂はるみ・忠井俊明・本間友巳(2006) 『不登校・ひきこもりと居場所』ミネルバァ書房
- (7) 文部科学省(2003) 『不登校への対応について』
- (8) 森田洋司(2003) 『不登校ーその後』教育開発研究所
- (9) 文部科学省(2009) 『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題の状況調査』
- (10) 奈良県教育委員会(2009) 『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題の状況調査』

教育相談プロジェクト研究

不登校児童生徒への援助の在り方

奈良県教育委員会指定研究員

奈良市立伏見小学校	養護教諭	安井 美穂
奈良市立都南中学校	教諭	上木戸 政子
県立奈良朱雀高等学校(定時制)	教諭	北口 嘉憲

奈良県立教育研究所 教育相談部

教育相談部	部長	梶本 修
教育相談係	係長	森下 道男
教育相談係	研究指導主事	森本 昭博
教育相談係	研究指導主事	安川 禎亮
教育相談係	研究指導主事	宮廻 なをみ
